

第2回「清の眼 根っこの眼 それぞれの地域学」(9/19 開催) モニター参加者レポート

第2回「清の目 根っこの目 それぞれの地域学」に参加して

林あゆ美

第1回に続いて参加いたしました。今回の場所はやないづ町立斎藤清美術館です。開催日はちょうど美術館で新しい企画展示に切り替わったタイミングでした。

講師は斎藤清美術館の学芸員である伊藤たまきさん、福島県立博物館学芸員の大里正樹さん、ブルーベリー園・農家民宿山ねこ店主の金子勝之さんの3人です。予定していた元柳津町地域おこし協力隊の金盛郁子さんは現在東京在住のため、コロナ禍の影響を考え、お話しする予定の文章を寄せてくださいました。

トップバッターは伊藤さん。美術館で企画展示と同時開催されているライブラリーコーナーの「やないづの家宝展」について、構想の始まりを、金盛さんの文章と共に話をしてくださいました。今年の家宝展も地域おこし協力隊お二人がつけられました。家宝は文字通り、家の宝物。柳津町の宝物を地域と地域おこし協力隊で見つけ出したものが展示されています。展示物の数は少ないものの、どれも存在感がある民具などです。又、美大生でもある地域おこし協力隊のお二人の作られる冊子もすごく素敵でした。さすが美大生！と思わせる秀逸なデザインと、文章もシンプルでわかりやすく、展示してあるものとの親和性高い美しい冊子です。

伊藤さんは異郷者の目線について語られました。斎藤清氏は、幼少の4歳までしか暮らしていなかった故郷を、外からの目線で見つめ描いてきたそうです。異郷者であるがゆえに引け目を感じていたところもあり、会津の雪は生活者にとっては過酷なものであるにも関わらず、このように描いていいのだろうかという葛藤を感じながら描いていたと教えてくださいました。しかし、それ故に、誠実な視線で描かれた雪は、「会津の」雪として固有なものを描き出しているように感じます。

次の講師は民俗学を専門としている大里さん。民俗調査者の一人として柳津町と金子さんについてお話されました。毎年2月に行なわれている胃中（かぶちゅう）地区のニンギョウマンギョウというワラ人形行事について調査した時に金子さんと出会われたそうです。地区名も祭り名もインパクトがあります。地元のお祭りでも、外からの観光客も求めず続けている行事。ワラ人形をつくるには長いワラが必要になるのですが、近年の農業の機械化でワラは粉碎され丈の長いワラが残らないため、2018年にはとうとうニンギョウマンギョウができなくなりました。そこで、長いワラを入手して継続していこうと金子さんの人脈で大規模農家からワラを譲り受け、今に至っているそうです。地元だけでは完結してやっていけない行事でも、地域を繋ぐ金子さんの存在があることで継続できました。繋ぐ存在の大事さがわかります。

金子さんが講師として話をしてくださったのは、自らの生活、その幸福についてです。自分は経済成長の恩恵を受けて過ごしありがたかったことや、結婚してからは、授かった娘たちが、早くに地元を離れ進学し、周りの人にどれだけお世話になったかという感謝の思いが強い話をしてくださいました。だからこそ、その感謝を今度は自分たちが別の若い人、地元の人に返していこうと思われたそうです。家族、地域を大事にし、上流に住んでいるから下流の人に迷惑をかけないようにと、畑も水も大事にし、化学肥料を使わず、食べ物を作っている金子さん。住まわれている西山地区の水のおいしさが、美味しいものを作っているといひます。毎日美味しいものを食べる幸せを、金子さんのとびきりの笑顔が表し、お話を聞いているこちらにも幸せな気持ちになります。

話を聞いていて、自分の住む地域についてもいろいろ思いを馳せました。私もここ会津では異郷者の一人。生まれ育ちは北海道。今の地域には家を建てるタイミングで住み始め、それでも20年以上になります。広い地区で、農家がほとんどをしめ、我が家のような非農家の割合は少ないです。村役員は10年に一度くらいの割合で回ってきて、初めての役員は住み始めてすぐの時でした。特に印象に残っているのは、歳ノ神の時の準備です。秋から始まる準備はカヤ刈りでした。その年ごとにカヤ担当の畑があり、そこから刈っていきます。刈ったカヤは、1月まで横にせず畑に立てて保存します。歳ノ神に必要な竹は村が所有している山から切ります。本番である1月の歳ノ神の日は朝から準備です。その日は吹雪でしたが、作業は外。カヤ、竹、ワラなど諸々をはこび、ワラで縄を編む人、竹などで組み立てていく人、手際よく進みます。ちなみに、私はワラを編む人に運ぶ係。編んでいる人は、編みながらこの家のワラはいいきだな、ここの家のワラは細いな、今ひとつだなといひながら作業します。どれも同じワラに見えるのですが、手でさわるとわかるのでしょうか。村の爺様たちは、歳ノ神を縛るのは昔からこうしたワラから編んだ縄だったけれど、いまやどこもビニールの紐を使っている、けれど、ここはきちんと作っているのだと自慢げに教えてくれました。吹雪にも関わらず、皆やるべきことを黙々と作業し、私などはたかだかワラを運んだくらいなのに、できあがった時はみなと同じく達成感を持たせてもらいました。夜になり、点灯の時間になると、家々から、竹の棒にするめや餅を刺し、それらを持った人たちが歩いてやってきます。「今年もよろしくお願ひします」とお酒やみかんを配り、新年の挨拶を交わします。消防団の人が火をつけ、その火でするめや餅を焼きます。いい夜です。けれど、年々雪も少なくなり、準備も大変ということで、地区2か所で行っていた歳ノ神も1か所になり、家から歩いて行くには遠くなったため、子どもが大きくなってからは、あまり行かなくなりました。

地域の行事を継続していくには、時間と人付きあいの折り合いが必要です。フルタイムの会社員をしていると、時間を捻出して参加するのが難しい。村の爺様たちと付き合っていくのも、なかなか大変です(笑)。私など何をしていても叱られてばかりで、へこんだものです。それでも、知らない世界は新鮮ですし、受け継ぐことの大事さも感じます。久しぶりの村役員の今年も、関わり始めるとおもしろい事も多いです。子どもは少なくなり子ども会はなくなり、村の人たちも多くの人は積極的に行事や村作業に関わるわけではありません。けれど、まずは役員の時くらい自分にできることをしようと思っています。

幸せに生きていくことは、住んでいる地域と繋がることにもある。金子さんの話を聞いて、ますますそう思いました。